

# 一心寺かわら版

第十九号 平成二十二年三月発行

## 「大地震」

最近、二つの大地震がありました。中米ハイチの地震ではなんと二十万人以上の人が亡くなりました。また、発展途上のハイチではその復興も大変難しく、被災者の窮状は依然深刻で、国際社会からの援助に頼らざるを得ないのが現実です。

南米チリの地震でも数百人が亡くなりました。被災地では救出活動が本格化する一方、一部住民の略奪行為や銀行襲撃などの犯罪行為も横行したようで大変な状況です。

日本にも二〜三メートルもの津波が来る可能性があるということと津波警報が発令され、大々的に警戒が呼びかけられました。実際の津波は一メートルほどで事なきを得ました。

このような自然災害を見聞きする度に、日本で、讃岐で生まれたしあわせを噛みしめると同時に、心苦しい気持ちが入み上げます。私たちは自ら生まれてくる場所を選べません。

自然災害や戦災、食糧不足で苦しむ人がいる、その一方で衣食住に困らない暮らしをしている私。復興支援募金することくらいしかできない私ですが、みなさまの生活と心身が安穩でありますように、合掌。

## 「バンクーバー・オリンピックを見て」

カナダ・バンクーバーで開催された冬季オリンピック、二月二十八日（日本時間一日）に十七日間に渡る熱戦を終えました。私はスポーツをするのも見るのも大好きです。最近はおっぱら見るばかりになってきましたが、今でも年に数回スノーボードをしま

すから、冬季オリンピックも親近感をもって観戦しました。みなさんは何の競技、どのような選手が印象に残っているでしょうか。



リンピックが開催されるかどうか、思い通りになりません。「なんでこんな一段一段なんだろう」と涙を流す姿に感動しました。

競技以外で話題を振りまいたスノーボード・ハーフパイプの国母選手。礼儀はきちんとするべきだと思いますが、その実力は本物です。他の選手も同様ですが、彼らが競技を続けていくには経済的な様々な困難があると知らされ、好きなことをするためには苦しみを乗り越えなくてはならないと改めて思い知らされました。

期待されたジャンプ陣。結局ベテラン岡部選手は出場できず、実力の世界の厳しさを痛感しました。彼の思いも込めて飛んだ葛西選



手、その笑顔からはオリンピックは出場することだけで選手冥利に尽きる素晴らしい大会なのだと感じました。



今大会で初めて面白さを知ったカ  
ーリング、クリスタル・ジャパン。ル  
ールが分かってくると大変緻密なゲ  
ームで、勝負が最後までもつれこむこ  
とが多く、手に汗を握りました。期待  
が大きかった分、八位という順位には  
満足できなかった方もいらつしやる  
でしょうが、世界ランキングは九位。  
健闘したと言えるでしょう。

三つのメダルを獲得したスピード・  
スケート。男子の長島選手と加藤選手  
は同じ会社のチームメイト、切磋琢磨  
するライバルがいたことが力になった  
ことでしょう。そして女子パシュート  
の田畑選手、穂積選手、小平選手。靴  
一足分、たった二十五センチ、百分の  
二秒差で銀メダルになった悔しさも大  
きかったと思いますが、精一杯やった  
という笑顔は清々しかったです。



フィギュア・スケートの高橋選手。大けがを乗り越えての銅メ  
ダル、ずっと支えてくれた長光コーチとの絆に感動しました。靴  
ひもが切れた織田選手、人生は本当に何が起るか分かりません。  
浅田選手と韓国のキム・ヨナ選手との金メダル争いに息をのんだ



方も多かったでしょう。今回もつとも  
プレッシャーを感じていたのが彼女だ  
と思います。残念ながらジャンプの失  
敗などがあり銀メダル、涙が溢れまし  
たが、気丈に表彰台に立つ十九歳をこ  
れからも応援せずにはいられません。  
また、

初出

場で八位入賞の鈴木明子選手の  
うれしそうな笑顔も印象的でした。  
喜びを感じられるかどうか  
は順位ではない、その顔からは  
すべてをやり遂げた満足感が溢  
れていました。



四国新聞の記事に「どんなに努力してもうまくいかないこと  
がある。もう少しで届きそうだったのに、ほんのわずかなところで  
目標に達しないときがある。周りに支えられ励まされ、今度こそ  
はと挑戦したが、夢と希望が打ち破られる場合がある。人生は、  
そうした場面の積み重ねといえるかもしれない。それらを凝縮し  
たのがスポーツであり、成功や勝利の場面と合わせて「スポーツ  
は人生の縮図」と言われるゆえんだろう。」とありました。  
私も同感です。人生では勉強、仕事など多くの場合、順位が付  
けられ、成功と失敗に分けられます。しかし、順位と人生の満足  
とは別だとオリンピックが教えてくれているように思います。

「人は守るものがない孤独であった方が強い」という方もいま  
すが、オリンピック選手を見ているとそうではないと感じます。

自分の願いと応援される方の願いが重なったときに、本当に力を与えてくれる願いとなり、苦しみや悲しみの中であっても安らぎや喜びがもたらされるのではないでしょう。

夫婦で同じ目標に向かって支え合った選手、師との絆で大けがを乗り越えた選手、家族の支えで病気との闘いに打ち勝った選手、亡き父に見てほしいと全力を尽くした選手、力及ばずその舞台には立てなかったけれども仲間へ声援を送った選手。就職先がなかなか決まらず競技を続けていけないのではないか、という不安に手を差し伸べてくれた支援者の温かさを胸に戦った選手。彼らに力を与えた願いは大きな大きなものでした。



さて、本年お配りした柱掛けのことばは「ふるさとに帰る 浄土に還る 同じぬくもり」です。みなさんにとって「ふるさと」はどういうイメージでしょうか。みなさんご存じの「ふるさと」という童謡があります

兔追いし かの山 小鮒釣りし かの川  
夢は今も めぐりて 忘れがたき ふるさと  
如何に在ます 父母 つつがなしや 友がき  
雨に風に つけても 思い出ずる ふるさと  
志を はたして いつの日にか 帰らん  
山は青き ふるさと 水は清き ふるさと

人には忘れがたいふるさとがある。ある人にとっては兔を追った山のある、小鮒を釣った川のあるふるさと。今はどこにいるのか、父や母、友がいたふるさと。志、人生でわが身を精一杯尽くして帰るところとして思い起こされる青き清きふるさと。

#### 親鸞聖人は

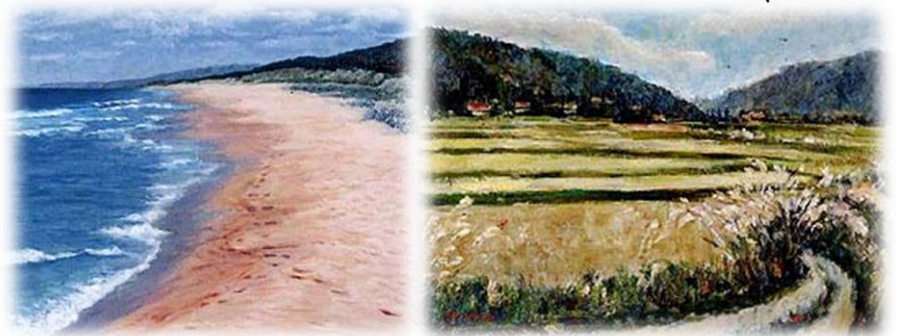
「一人居てよろこびなば二人と思ふべし。二人居てよろこびなば三人と思ふべし。その一人は親鸞なり。」

とおっしゃられたといえます。また

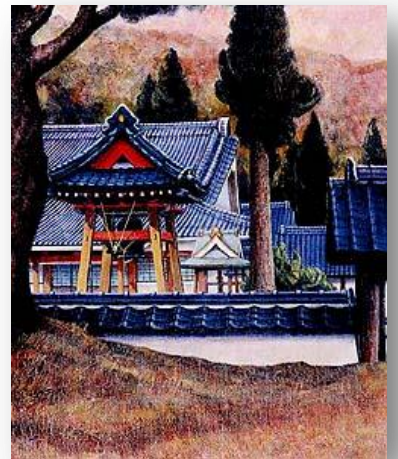
「この身は、いまは、とときはまりて候へば、さだめてさきだちて往生し候はんずれば、浄土にてかならずかならずまちまいらせ候ふべし。」『親鸞聖人御消息』

私は、今はすでに多く年を重ねてしまいましたから、みなさまより先に往生して、浄土にて必ず必ずお待ちいたしております。ということばを残しておられます。

阿弥陀仏が願われているお浄土は、親鸞聖人も、私を支えてくれた愛しい人も、けんか別れた人も、身内も他人も敵も味方も区別なく出会うことのできる、ぬくもりのある世界です。それは撰取不捨、今この私を撰め取っておられます。



浄土真宗は浄土に往生、往き生まれる、往き生きる教えです。ふるさとと同じく温もりあるかぎりないのちが私を包み支えて下さっているところに、生きる力溢れ、喜びを感じて念仏してきたのが真宗門徒でしょう。



### お経ってなあに？⑧「往生礼讃偈」

浄土真宗七高祖の一人、善導大師の作です。浄土に生まれることを願うものが日常実修するべき六時（日没（十四時）・初夜（十八時）・中夜（二十二時）・後夜（二時）・晨朝（六時）・日中（十時））の礼法、称名念仏専修の実践とその意義、またそれによって現世と当来の益が得られることが説かれています。

浄土真宗の日常修行としては正信偈が読誦されますが、それは蓮如上人の頃から広まってきたとされ、それ以前はこの往生礼讃偈が勤められていました。年輩の方は、家でおじいさん、おばあさんがお勤めされていたその曲と声が耳に残っているかもしれないませんが、最近では耳にする機会が減っているのではないかと思います。

当山では現在、初七日法要の折にお勤めしています。何度となく繰り返し聞こえてくる「願共（がんど）」の声、あなたを清らかな浄土に生まれさせたいと願われている阿弥陀仏の「願」、すでに浄土往生された方の「願」、そして浄土に生まれさせていただく私の「願」に思いを巡らせて合掌、念仏させていただきます。

### 仏教から生まれた日本語①「我慢」（がまん）

私たちが話していることば、日本語にはさまざまな由来があり、仏教から生まれたことばもたくさんあります。以前、掲載した真宗のことば、「他力本願」と「往生」も現在は一般的に使われており、それぞれ、他人の力をあてにすること、困ったことをあらず時に使うことば、になってしまっています。しかし、元来は仏教語であり、意味が異なっているのは以前にお伝えした通りです。知らず知らずに使っている仏教由来のことばを通して、その教えに触れてみましょう。

「我慢」は七慢の一つとされます。「我」は自分に執着することを行い、「慢」は慢心を表します。要するに、自分の力を過信しうぬぼれることをいいます。現在「我慢」は、欲しいものを耐え忍ぶ、辛抱する意味で使われますが、文字通り読めば「我慢」はその逆で、悪いことなのです。

仏教では「我」を否定します。それは「我」を立てれば「他」と分けて、自分を高く見て、他を軽視する思いあがりの心が生まれるからです。

七慢の残りの六つは慢、過慢、慢過慢、増上慢、卑慢、邪慢ですが、特に注意したいのは卑慢（卑下慢・ひげまん）でしょうか。現在は、へり下っているふりをして、実際には自慢するということ意味合いで用いられています。本来は、自分より数段勝るものに対して、少し劣るのみと思つて慢心することだそうです。

どちらにしても仏教でいうところの「我慢」をおこさないように我慢しなくてはなりませんね。

〔仏教が生んだ日本語〕大谷大学編より抜粋編集